

CycleGen

サイクルジェン

人間とAIとの協働を

再現可能な仕組み にする思想・メソッド・ツール

思想

ツールや人が変わっても揺るがない原則

メソッド

1,000+ 時間の人間-AI協働の実践から体系化

ソフトウェア

人間-AI協働を確かなものにするフレームワーク

CycleGenとは？

CycleGenは、人間とAIの協働を「再現可能な仕組み」にする考え方（思想とメソッド）と支援ツール（ソフトウェア）です。主要なAIサービスにプラスして、人間とAIの協働を効果的なものにし、競争優位性の源泉になる知的財産が組織に蓄積されるようにします。

企業・組織の全従業員のためのメソッドというよりは、調査研究、企画、PR・マーケティング、製品・サービス開発、事業開発など、正解のない問いを扱い、判断と言語化が価値になる職種の人たちを支援する思想・メソッドと支援ツールです。

	従来のAI利用	CycleGen
知見の保存	Chat履歴に埋もれる	「サービス提供者のサーバー」から「あなたの組織の手元」
記憶の継承	毎回ゼロから説明	AIが記憶を引き継ぐ
ノウハウ	個人のノウハウ	組織の資産

ドキュメントはAIが書いて保存。人間は判断する。このアプローチを着実に繰り返すことで、人間はAIとの協働だからこそ到達できる領域へ。

実績: 1,000時間超の協働の知見 / 300件+の知的財産創出 / 従来の10倍以上の生産性

CONFIDENTIAL

本資料は、CycleGenの評価・導入検討、投資判断、およびパートナーシップ検討を目的として、限定的に提供するものです。

本資料の全部または一部を、株式会社らしくの書面による事前の許諾なく、第三者への開示、複製、配布、または二次的著作物の作成に利用することを禁じます。

本資料に記載されたメソッド、ソフトウェア設計、および関連する知的成果物は、OpenTimestampsプロトコルを用いたブロックチェーンタイムスタンプにより存在証明が記録されています。

© 2026 株式会社らしく (RASHIKU Corporation) . All rights reserved.

このようなことがあなたの組織でも起こっていませんか？

Scene 1: 田中さん



ChatGPTで企画資料を作成。
3時間で高品質なアウトプットが完成。
「うまくいった！」

Scene 2: 佐藤さん（5日後）



同じ資料を作ろうとするが、「田中さんは
どうやった？」と聞けず。結局ゼロから
試行錯誤し、品質もばらつく。

Scene 3: 新人（3ヶ月後）



「やり方はチャット履歴を見て」と言われる。
何が重要かわからないまま時間が過ぎる。

CycleGen の適用でこのようになります

田中さん



「ドキュメントが自動的に
作られるので、なぜ成功し
たかが一目瞭然」

佐藤さん



「ドキュメントを読むだけで、
田中のやり方を完全再現。
2回目は30分で完了」

新人



「『なぜこうなっているのか』
の論理が記録されているので、
3日で戦力化」

✔ 組織の創造性・生産性の向上 ✔ 再現性向上 ✔ 短期間で戦力化

あなたにとってのCycleGen

CycleGenがもたらす価値は、あなたの立場によって異なります。

経営者・事業責任者の方へ

「野良AI化」を防ぎ、AI活用を組織の資産に変えます

課題	CycleGenの解決策
社員がバラバラにAIを使い、ノウハウが残らない	標準プロトコル（AIが遵守する協働ルール）で全社員のAI協働品質を底上げ
AIの利用状況が見えない	CYCLE完了報告書で「誰が・いつ・何を」を自動記録
投資対効果が不明	ドキュメント蓄積により、成果が可視化・計測可能。中間成果物も含め、組織内の資産が自然に蓄積

ビジネス職の方へ

エンジニアに頼らず、デジタル作品を自分で作れます

課題	CycleGenの解決策
システムや動画を作りたいが、技術がない	ビジョンを伝えれば、AIが設計・作成
AIの使い方がよく分からない	CycleGen ソフトウェアがガイド。学習コスト最小
成果物の品質にばらつきがある	設計書（構造化プロンプト）+CYCLE管理で、安定した品質

エンジニア・開発者の方へ

開発プロセスそのものを進化させます

課題	CycleGenの解決策
ドキュメント作成が面倒	AIが設計書・報告書を自動生成
過去の知見を活用しきれない	記憶整理検索機構で即座にアクセス
品質とスピードの両立が難しい	CYCLE管理で両方を実現

投資家・ITコンサルティング事業会社の方へ

実証済みの方法論にもとづき、企業や組織が”コントロールとデータの主権を取り戻す”支援を行えます

項目	内容
実績	1,000時間超の人間-AI協働の実践から得た知見とノウハウ
知的財産	300+の知的財産の創出 特許出願準備中のものあり
市場規模	全ナレッジワーカー（日本だけで約2,000万人）
展開計画	個人版（現行）→ 企業・組織版 CycleGenは、お客様の環境（社内サーバーまたはプライベートクラウド）で動作します。AIとの協働で生まれた知見と判断の記録は、すべてお客様の組織に帰属します。

目次

はじめに

1. CycleGen 誕生までの経緯や思想

2. CycleGen メソッド 概要

3. CycleGen ソフトウェア 概要

4. もっと CycleGen を理解する

さいごに

はじめに

生成AIはとても便利です。しかし、こんな経験はないでしょうか？

「あのときのChatGPTの素敵な回答が見つからない」

「生成してくれた文章を、自分でコピペ整理するのが面倒」

「毎回、状況を説明し直すのに疲れる」

「会話が長くなると、トンチンカンな回答が返ってくる」

これらは、従来の生成AI利用の構造的な限界です。**Chat履歴は消え、知見は散逸し、同じ説明を繰り返す**——この問題を解決するのが CycleGen です。

きっかけ・経緯

2025年6月、Anthropic社のClaude Codeに出会いました。従来のチャット型AIと決定的に異なるのは、**AIがパソコン内のファイルを読み書き**できることです。

私は「ビジネス文書作成や動画作成にも使えるのでは」と着想し、AIエディタとの協働を開始。現在までに1,000時間を超える協働を行ってきました。

結果は、当初の想像をはるかに超えています。**従来手法の10倍以上の生産性**を実現し、

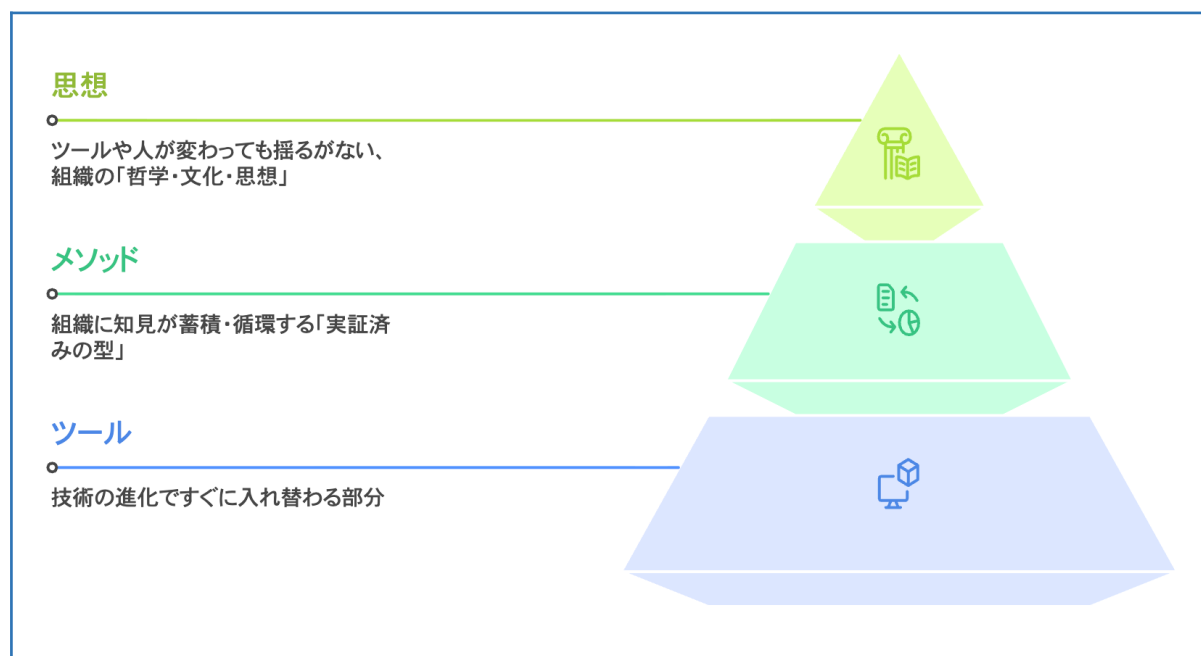
「とても私だけではできなかったことができる」という、私（人間）の**能力拡張**を実感することが多々ありました。

しかし、最も衝撃的だったのは**生産性の向上ではありません**。AIが対話の内容をドキュメントとして整理・保存し、そのドキュメントが次の対話の土台になる。この積み重ねを続けていくと、ある瞬間、**自分では決して辿り着けなかったアイデアにAIが気づかせてくれるの**

です。過去の判断や知見が結びつき、予測もしなかった発想が生まれる——この体験は、言葉で伝えることが難しいものです。だからこそ、この冊子を通じて、その一端でもお伝えしたいと思っています。

CycleGenとは

この冊子でご紹介するCycleGenは、私とAIEDィタとの協働から得た知見をもとにした、多くのAIEDィタに（少し未来にはAIEージェントにも）適用可能な汎用的な人間-AI協働の考え方（思想とメソッド）とツール（ソフトウェア）です。



オープンソースライセンスとしての公開を予定しています。

AIと協働でデジタル作品を作る時代の到来

1990年代以降、ナレッジワーカーが生み出す成果物の多くは「デジタル作品」になりました。提案書、計画書、Webサイト、業務システム——私たちは日々、膨大なデジタル作品を作っています。

そして今、生成AIとAIエディタの普及により、この流れは爆発的に加速しています。もはや、ナレッジワーカーがAIなしで仕事をする時代には戻りません。

しかし現実には、AIを効果的に活用できている人はまだ限られています。多くの企業・組織が、AIの価値を十分に引き出せていないのが実情ではないでしょうか。

いま求められているのは、**AIの活用を前提とした新しい働き方**——いわば「Future of Work 2.0」の考え方です。

この冊子でご紹介するCycleGenの人間-AI協働の考え方が、皆様のビジネスや組織の価値拡大の活動において、何らかのヒントになれば幸いです。

1. CycleGen 誕生までの経緯や思想

生成AIは、ほとんどのデジタル作品を作成できる

戦略レポート、書籍・出版物、ビデオ、提案書・計画書、研修資料、システム入力データ——パソコンとソフトウェアで作成できるすべてのデジタル作品は、生成AIとの協働で作成できる時代が到来しています。



エージェントAIの普及と、パートナーとしてのAI

Claude Code / CoworkやGoogle AntigravityなどのAIエディタもしくはエージェントAI（AIが自律的にタスクを遂行する技術）が普及しはじめています。人間がAIに任せられる業務範囲は急速に広がっています。また、AIエディタはソフトウェアエンジニア向けのツールの側面が強いと思われがちですが、ナレッジワーカーにとってもとても強力なツールです。

しかし、これまでの生成AIの利用のように、AIを「便利な道具」とみなして使うだけでは、得られる価値は限定的です。価値を最大化するには、**AIを有能なビジネスパートナーとして扱うアプローチ**が必要になります。

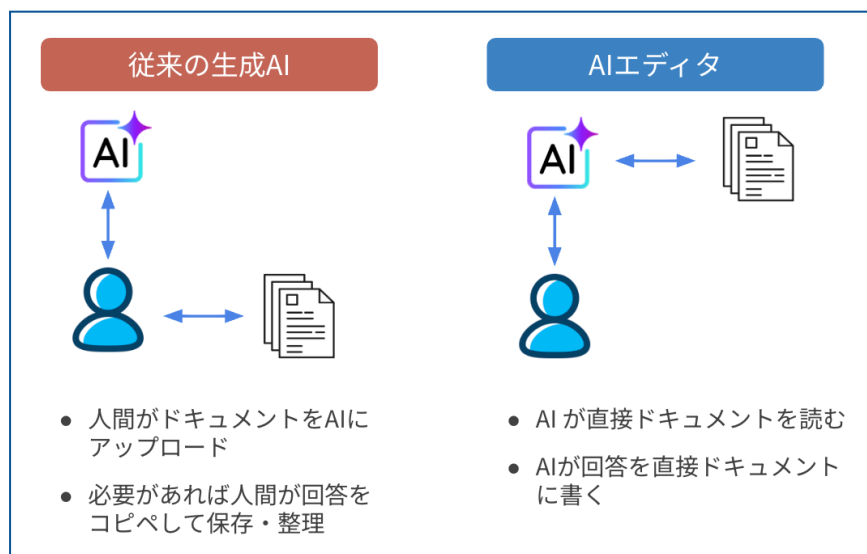
AIエディタがもたらす構造的変化

[ご参考 - Google Antigravity の利用イメージ]



従来の生成AI（チャット型）とAIエディタには、決定的な違いがあります。

AIエディタ（Claude Code、Claude Cowork、OpenAI Codex、Google Antigravity等）で重要な機能は、**AI自身がファイルをパソコン内に作成・編集してくれること**です。協働が進むごとに価値のあるドキュメントが蓄積され、AIはそれらを再利用して、さらなる価値ある仕事をしてくれます。そして、価値ある成果物はもちろん、再利用できる設計書や、なぜその判断をしたのか、などの**記録が手元に残る**のです（この重要性和価値は後ほど説明します）。



実践から得た確信

2025年6月からAIエディタ（Claude Code）との協働を開始し、実験的な取り組みや、個人でのプロジェクトも含めて、実際の業務で活用してきました。振り返ると、**AIエディタとの協働でなければ到達できない領域**に到達していると感じます。

実践領域	成果
調査研究・企画・計画	調査研究・企画・計画フェーズにおいて、検討と文書化が、驚くほどスピーディ・高品質・人間の負担が軽減
書籍・マーケティング資料作成	英語でのウェブ記事や書籍の企画・編集・執筆を実施。特に執筆フェーズでは、複数のAIエディタに、章ごとに手分けして執筆してもらうアプローチを確立
業務システム開発	これまでエンジニアに依頼していたシステム開発・テスト・本番反映を、私1人+Claude Codeで完遂
CycleGen メソッドとソフトウェアの作成	パソコン内のこれまでの協働の経験・知見、そしてうまくいかないこと、などが記録されているドキュメントを有効活用して、メソッドとソフトウェアを作成

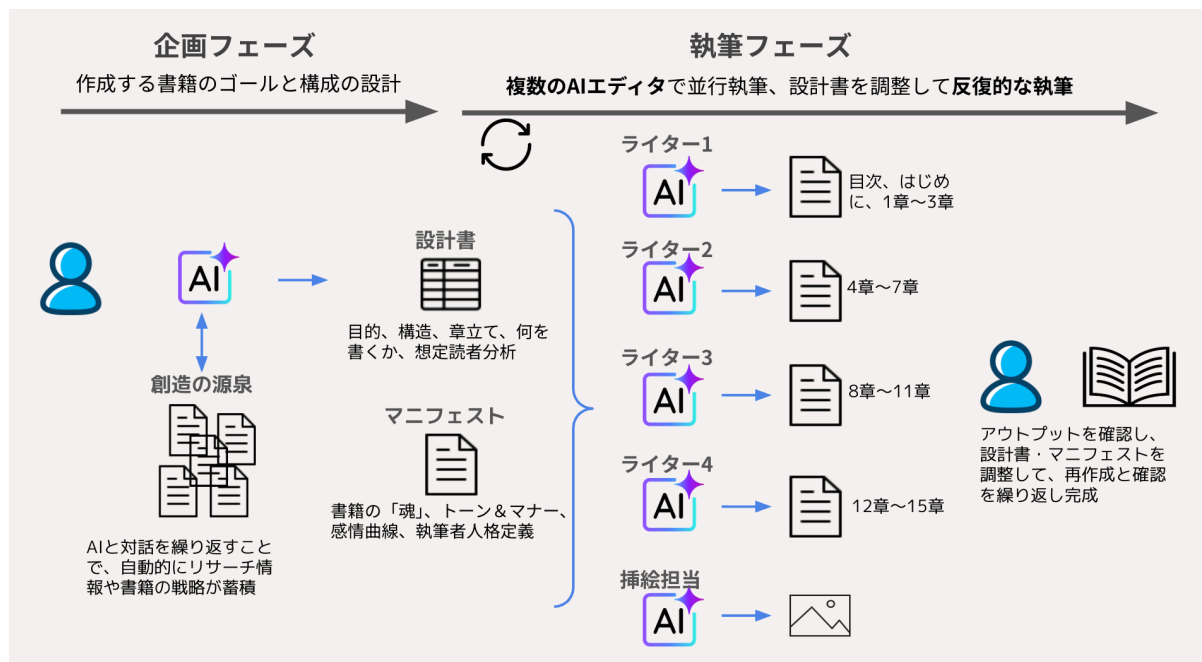
従来手法と比較すると、驚異的な生産性を計測しています。そして、これまでできていたこと以外に、AIとの協働だからこそその領域に踏み出せたことや獲得した多数の知的財産が創出されています。単に、「楽になった」を超えた「**私（人間）の能力が拡張した**」「**創造性が次のステージに**」のような感覚をたくさん経験しました。

次のセクションで、具体的な事例をご紹介します。

実験的な取り組みの例 - AI時代の新しい書籍制作

2025年7月に行った協働の例「**「設計図」から全章を同時生成する、超高速・高品質な執筆アプローチ**」をご紹介します。

従来の「1ページ目から順番に書く」「書きながら構成を考える」という進め方から脱却し、AIをチームとして稼働させることで、執筆の常識が塗り替えられます。



1) 「やり直し」を恐れない：修正コストの劇的な削減

これまでは、数百ページの原稿を書き上げた後に「構成やトーンを根本から変えたい」と思っても、膨大な作業量を前に断念せざるを得ませんでした。

しかし、本手法では「設計書」と「指針（マニフェスト）」を書き換えるだけで、わずか30分ほどで300ページ全編の新しいバージョンを作成できます。人間は細かい手直しに追われることなく、「本の魂」である設計のブラッシュアップに専念し、納得がいくまで何度でも試行錯誤を繰り返せます。

2) 「一人で書いた」ような統一感：AIチームによる一貫性

複数の人間で分担して書くと、どうしても文体や主張のズレが起きてしまいます。

この手法では、複数のAIライターが「共通の設計図」と「共通の執筆人格」を完全に共有した状態で一斉に書き始めます。その結果、まるで一人の熟練ライターが一気に書き上げたかのような、高い一貫性と質の高さを保つことができます。

3) 「順番に書く」からの解放：圧倒的な制作スピード

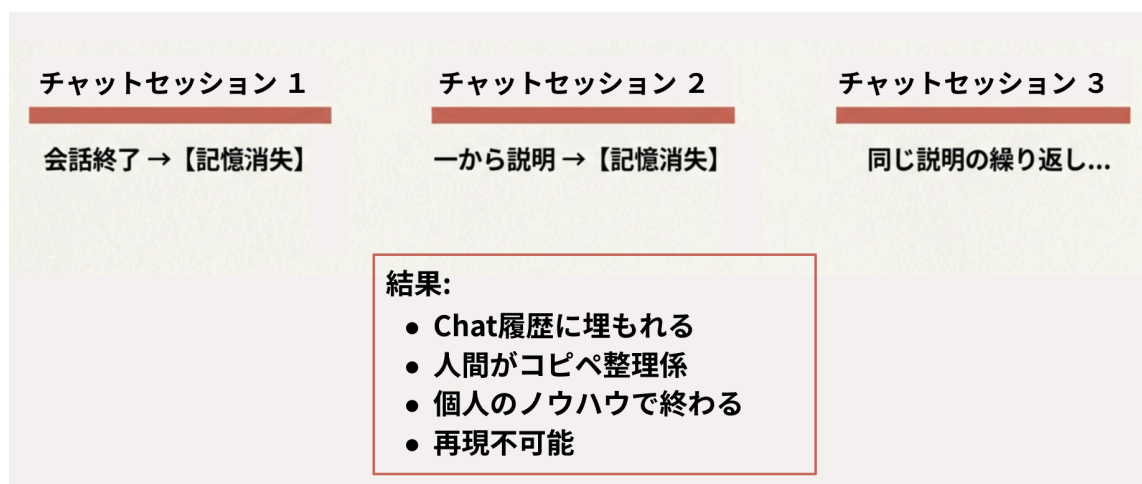
人間は物理的に「1章、2章……」と順番にしか書けず、数ヶ月の時間がかかるのが当たり前でした。

AIエディタを活用すれば、**全15章を「同時に」書き進める並行処理**が可能です。集中力の限界や疲労といった「人間の制約」に縛られず、本来なら数ヶ月かかるプロセスを数十分に短縮。圧倒的なスピードでアウトプットを手にすることができます。

Before / After : AI利用の構造変化

ChatGPTやGeminiなどの生成AIが登場してから、多くの組織でAI活用が始まりました。しかし、個人が思いつきで使う「点」の活用に留まり、組織の資産として蓄積されていないのが実情です。CycleGenは、このAI利用を根本から変革します。従来の利用とCycleGenでは、何が違うのか。そして、組織にどのような価値をもたらすのか。具体的に見ていきましょう。

【Before: 従来のAI利用】



多くの組織で、以下のようなAI利用が行われています。

チャットセッション1: ある社員が新規事業のアイデアについてChatGPTと対話。優れた提案を得て、「うまくいった!」と満足します。

チャットセッション2: 数日後、別の社員が似たテーマで再度AIに質問。しかし、前回の知見は共有されていないため、ゼロから説明し直すことに。AIの回答も、前回とは異なる方向性を示します。

チャットセッション3: さらに別の社員も、同じような内容を何度も説明する羽目に…

この繰り返しが、組織全体で無数に発生しています。

結果、以下のような問題が生じます:

Chat履歴に埋もれる: 優れた対話や知見が、個人のChat履歴の中に埋もれて見つけれなくなりま

人間がコピペ整理係: AIが生成した文章を、人間が手作業でコピー&ペーストし、ドキュメントに整理する必要があります。膨大な時間が浪費されます。

個人のノウハウで終わる: 効果的なプロンプトの書き方や、AIとの対話のコツは、個人の暗黙知として蓄積され、組織に共有されません。

再現不可能: 「あの時の素晴らしい回答、もう一度出してほしい」と思っても、同じ結果を再現することができません。セッションが途切れれば、文脈も失われます。

つまり、従来のAI利用では、**個人の生産性は向上しても、組織の知的資産は蓄積されない**のです。

【After: CycleGen の利用】

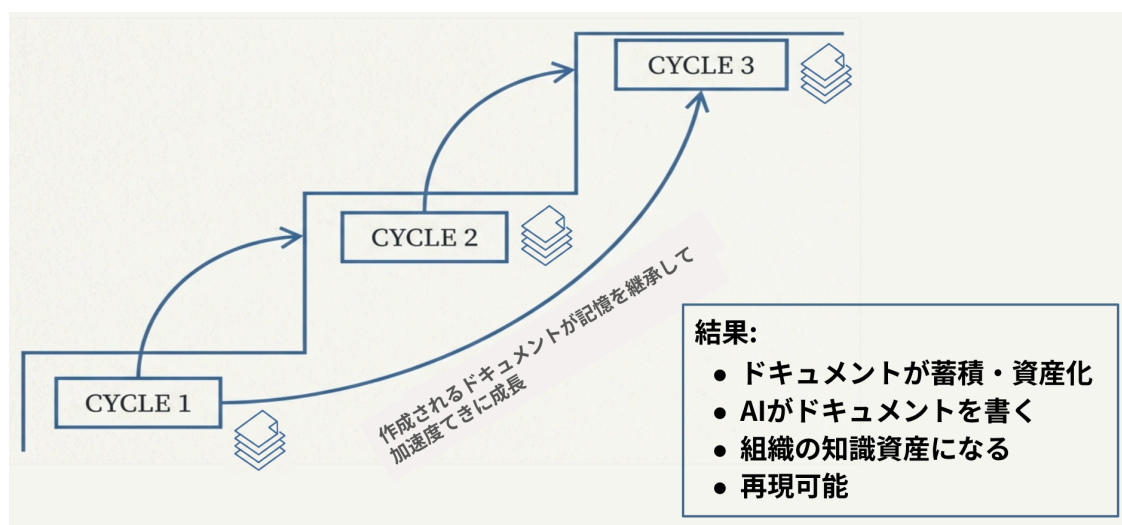
CycleGenを導入すると、AI利用の構造が根本から変わります。

1つのサイクル(約1時間のPDCA)が完了するたびに、以下が自動的に実行されます:

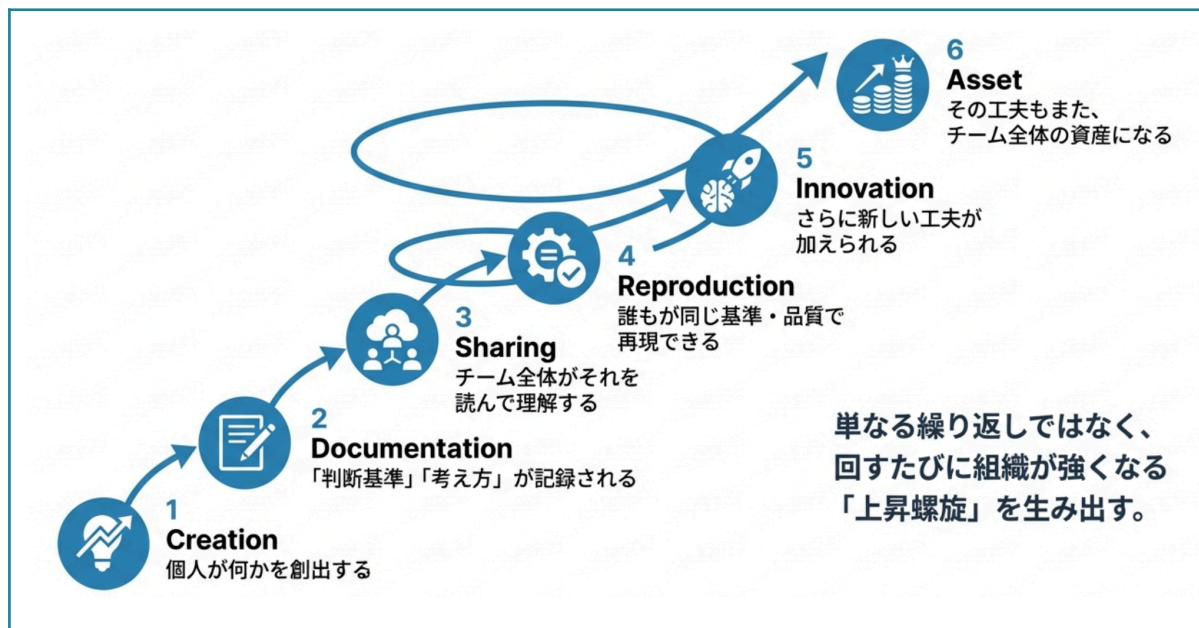
ドキュメント化: AIとの対話内容、判断基準、成果物が構造化されたドキュメントとして保存されます

資産化: 個人の作業成果が、組織全体で検索・再利用可能な知的資産に変換されます

記憶の継承: 次のCYCLEでは、過去の文脈と知見をAIが自動的に引き継ぎます



そして、このメソッドが組織に浸透していくと、以下のように上昇螺旋的に、組織に資産が蓄積してさらなる価値を生み出すようになります。



一言で表すと:

Chat履歴中心の「点」の活用から、ドキュメント中心の「線・面」の協働へ

点 (Point)	線 (Line)	面 (Plane)
単発のチャット	コンテキストの継承・接続	組織全体に広がる知識資産

この転換により、AI利用が「個人の便利ツール」から「組織の成長基盤」へと進化します。

完成品だけでなく中間成果物も組織の資産に

ChatGPTやGeminiで資料を作ると、完成品は確かに残ります。

しかし「なぜこう作ったのか」という判断基準と知見は残りません。しかし「なぜこう作ったのか」という判断基準と知見は残りません。それはChat履歴の中に散逸し、あなたの組織の資産にはなっていません。

具体的に考えてみましょう。

ある社員がAIを使って新規事業の提案書を作成しました。

- 完成した提案書(PowerPoint): ✓ 手元に残る
- なぜこのアプローチを選んだのか: ✗ Chat履歴に埋もれる
- 検討したが却下した代替案: ✗ 消失
- 判断の根拠となった市場分析: ✗ 消失

3ヶ月後、別の社員が類似のプロジェクトを始めます。しかし、過去の判断基準にアクセスできないため、同じ検討を最初からやり直すことになります。

これが、実は極めて大きな問題です。

なぜなら、同じAIを使っている競合他社も、同じ完成品を手に入れているからです。

3年後、5年後の競争力の差は、「見えない判断基準」を組織資産に変えたか否かで決まります。

完成品は「消費される」。判断基準は「蓄積される」。

競合と同じ完成品を持っていても、判断基準を蓄積しなければ、組織は学んでいないということです。

CycleGenは、その『残しづらかった中間成果物』を『組織の資産』に変える仕組みです。

具体的には

CycleGenは、以下の3つのメカニズムで中間成果物を組織資産に変換します：

1. 自動ドキュメント化

- AIとの対話が終わるたびに、CYCLE完了報告書が自動生成されます
- 「何を決めたか」「なぜそう判断したか」「次に何をすべきか」が構造化されて記録されます
- 人間はコピー作業から解放され、判断に集中できます

2. 形式知への変換

- 個人のAI活用の成果を、Markdown形式の読みやすいドキュメントとして保存
- チーム全体が検索・参照可能な形式知に自動変換されます
- Googleドキュメントやスプレッドシートとしても出力可能です

3. 再利用可能な設計書として蓄積

- 一度作成した企画書や分析の「設計書」は、次のプロジェクトで再利用できます
- AIが過去の設計書を参照し、さらに洗練された成果物を生み出します
- 組織の判断基準が、使うほどに強化されていきます

すぐに目に見える効果

「2回目の企画は30分で完成」（1回目は3時間）。「新人でも同じレベルの品質」。「チーム間でばらつきがない」。これらは、個人の工夫が「組織のルール」に変わったことの証です。

長期的な価値

しかし、本当に大きな変化は、もっと先にあります。**A部門で蓄積した判断基準が、Z部門の資料作成で再利用**される。営業部門の成功パターンが、企画部門の新しいアイデアを刺激する。**AIが異なる部門の知見を、人間では決して紐づけられない方法で掛け合わせ、革新的なアイデアを創出**する。

組織全体の知的資産が循環し始めます。

判断基準の見える化は、短期的には「効率化・生産性向上」です。しかし長期的には、それが「組織全体の知識資産循環の基盤」となり、AIが「知見の触媒」として機能し始め、**予測不可能な創新が生まれる**環境を創ります。

この環境では、個人の工夫の総和ではなく、**知見同士の相乗作用がもたらす非線形の価値創造**が起きるのです。

CycleGen は「AIとの協働を効率化する」だけでなく、「組織の知的資産を循環させ、**創新の環境を創る基盤**」

CycleGen の設計思想 — AIの特性を活かす

CycleGen メソッドは、AIの現在の特性を「制約」ではなく「設計条件」として組み込んでいます。

AIの特性を理解する

AIは強力ですが、以下の特性があります：

特性	現象
目的逸脱	問題解決に夢中になり、本来の目的を忘れることがある
長時間作業の課題	60分を超えると、文脈整合性が低下する傾向
過度な指示への反応	マイクロマネジメントだと能力を発揮しにくい

だからこそ、CYCLE管理

CycleGenは、これらの特性に対応した設計になっています：

特性	CycleGenの対応
目的逸脱	30~40分の実行時間 で区切り、逸脱を早期発見
長時間作業の課題	CYCLE単位で完結 させドキュメント化を必ず実施することで、不測の事態でもやり直し（再現）可能
過度な指示への反応	ビジョン+制約 の指示スタイルを標準化

人間とAIの役割分担

役割	人間	AI
ビジョン	達成したいことを示す	—
制約	条件・制限を伝える	—
アプローチ	—	手段を考え、提案する
実行	—	ドキュメント作成・作業
判断	成果物を承認・軌道修正	—

結果: AIの強みを最大化しつつ、弱点を補完する仕組みが完成しました。

CycleGenの2つの構成要素

CycleGenは「考え方（思想とメソッド）」と「ツール（ソフトウェア）」の2層で構成されています。

区分	名称	内容	ツール依存
考え方（思想とメソッド）	CycleGen メソッド	人間-AI協働の思想・型・原則・役割分担	No（どのAIEDィタでも適用可能）
ツール（ソフトウェア）	CycleGen ソフトウェア	メソッドを実運用で機能させるソフトウェア	Yes（現行版は Claude Code + Python）

ポイント

考え方（思想とメソッド） は汎用的な協働原則。どのAIEDィタ（Claude Code、Claude Cowork、Google Antigravity、OpenAI Codex等）にも適用可能です。

ツール（ソフトウェア） はメソッドを「使えば使うほど賢くなる環境」として実装したものです。現在は個人PC版が稼働中であり、将来的には、組織の知的資産にアクセスしやすい形での提供（社内サーバーまたはプライベートクラウド）を想定しています。

2. CycleGen メソッド 概要

CycleGen メソッド とは

CycleGen Methodは、人間とAIが役割を分担し、CYCLE（計画→実行→振り返りの反復単位）を回しながらデジタル作品を生み出すための実証済みの方法論（思想とメソッド）です。

- すべてのコンテンツ創造プロジェクトがソフトウェア開発のような反復作成が可能
- CYCLE（人間とAIとの約1時間のPDCA）の繰り返しで蓄積される知見・アイデアが、すべてのデジタルコンテンツ創出の源泉に

1,000を超える協働CYCLEの実践から体系化しました。理論ではなく、実際に動いている仕組みです。

核心メッセージ

ドキュメントはAIが書いて保存。人間は判断する。このアプローチを着実に繰り返すことで、人間はAIとの協働だからこそ到達できる領域へ。

ドキュメント（計画書・設計書・報告書など）を人間が書くとしたら、面倒です。しかし、**AIが書きます**。人間はメモ書きや箇条書きの指示を出すだけで、AIが設計書や報告書に仕上げます。AIがドキュメントを書くことで、**人間は判断と創造に集中でき、次のステージに進めます**。

解決する課題

いま多くの組織で起きている問題があります。

課題	症状
野良AI化	個人がバラバラにAIを使い、組織に知見が残らない。近い将来は野良AIエージェント化も予想される

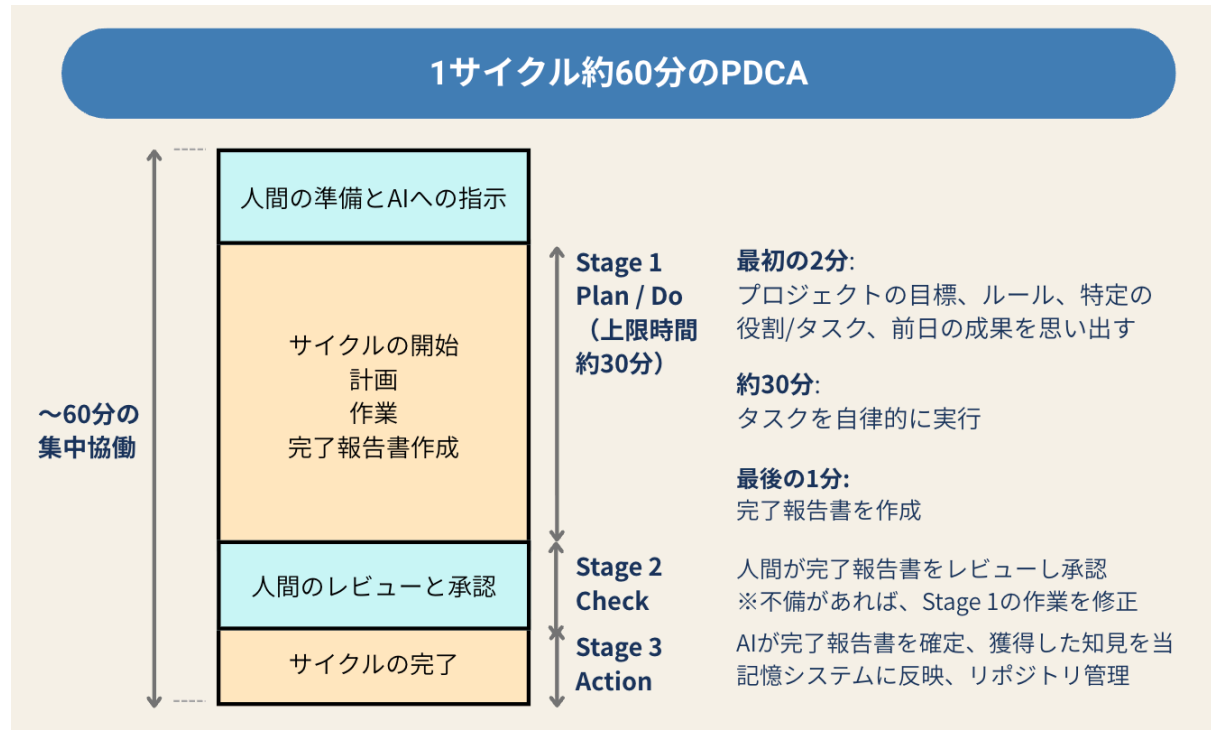
属人化	特定の人しかAIを使いこなせない
再現性の欠如	同じ結果を再び得ることができない
知識の散逸	やりとりの記録が消え、学びや資産が蓄積しない

CycleGen メソッドは、これらの課題を**個人の努力ではなく、仕組みで解決**します。

CYCLE（サイクル） - 人間とAIとの約1時間のPDCA

CycleGenの中核は「CYCLE」と呼ぶ約60分の協働単位です。1つのCYCLEは、製造業で確立されたPDCAサイクルをAI協働に最適化したもので、「計画・実行（Plan/Do）」「確認（Check）」「改善（Action）」の3つのStageで構成されます。

この時間単位には意味があります。人間の集中力が持続する範囲で、かつAIが意味のある成果物を生成できる最小単位として、2025年7月の145時間の集中的なAIとの協働の実践から導き出しました。



Stage 1 : Plan / Do (上限約30分)

AIがプロジェクトの設計書（AGENT.md）を読み込み、前回のCYCLEからの引き継ぎ事項を確認したうえで、タスクを自律的に実行します。人間が出す指示はメモ書きや箇条書き程度

で十分です。AIが計画書や設計書レベルのドキュメントに仕上げ、最後に完了報告書の暫定版を自動生成します。

Stage 2 : Check (人間のレビューと承認)

AIが生成した成果物と完了報告書を、人間がレビューします。ここが「人間は判断する」の実践ポイントです。品質に問題があればStage 1に差し戻し、AIに修正を指示します。この承認ゲートがあることで、AIの暴走や品質のばらつきを構造的に防ぎます。

Stage 3 : Action (確定と記録)

人間の承認を受けて、AIが完了報告書を確定します。そのCYCLEで獲得した知見を記憶システムに反映し、成果物をリポジトリに保存します。この記録が次のCYCLEの起点となり、知見が組織に蓄積されていきます。

この3段階のゲート構造により、「AIに任せきりで品質が安定しない」「やりとりの記録が残らない」という、現在多くの組織が直面している課題を仕組みとして解決します。

CYCLE完了報告書

各CYCLEの最後に自動生成される完了報告書は、単なる議事録ではありません。「何を目指し（ミッション）」「何を作り（成果物）」「何を学び（獲得した知見）」「次に何をすべきか（次のアクション）」を構造化して記録するドキュメントです。

これにより、**プロジェクトメンバーの交代やAIセッションの中断が発生しても、完了報告書を読むだけで文脈を復元し、作業を継続できます。**また、組織全体で「誰が・いつ・何を・なぜそう判断したか」が自動的に可視化されるため、**経営層が求めるガバナンスとトレーサビリティ**も同時に実現します。

ご参考までに、次のページにGoogle ドキュメントとして自動的に生成される CYCLEの完了報告書を掲載します。CycleGen の事業戦略調査やメソッドのリファインを行っていた際の例です。

承認前のAIが作成した暫定版の完了報告書を私（人間）が確認・承認したのち、以下の完了報告書が完成します。

[ご参考 - CYCLE完了報告書の実物]

CYCLE225 完了報告書

CYCLE番号: 225 開始日: 2026-01-31 完了日: 2026-01-31 種別: 事業戦略調査・メソドロジーリ
ファイン 前提CYCLE: CYCLE224 (サービス戦略設計)、
CYCLE223 (サービス戦略設計)

1. ミッション

CYCLE224で構造化したJAY-NATSUメソッド事業化戦略を踏まえ、以下の3つの調査・検討を実施する:

1. 知財無償許諾契約の設計 (知財無償許諾契約の設計・ブランド保護の両立)
2. 知財無償許諾契約の設計 (知財無償許諾契約の設計)
3. 知財無償許諾契約の設計 (知財無償許諾契約の設計)

2. 成果物

2.1 調査レポート

#	ドキュメント	ファイル	内容
1	CYCLE225 中間報告	docs/investigation/CYCLE225_中間報告.md	ID保護戦略 吐き出し 全 ン フ

2.2 改訂したドキュメント

#	ドキュメント	ファイル	変更内容
2	メソドロジーアウトライン	docs/cycles/CYCLE3_アウトラインA_人間AI協働メソドロジー_案.md	第2章「AIを理解する」新設、全章番号繰り下げ

CycleGenの4つの柱

CycleGen メソッドを支える4つの原則です。

柱	内容
1) ドキュメント駆動	人間のビジョン・着想を、AIが理解しドキュメント生成・保存。後日の人間-AI協働でも、そのドキュメントをもとに記憶が復活、さらなるリファインや拡張へ。
2) プロトコルファースト	AIは作業前に必ず協働ルール(AGENT.md)を確認。短期的な記憶よりも記録されている文書を基準にする。
3) CYCLE管理 / 3段階プロトコル	作業をCYCLE（計画→実行→振り返り）に分割し、反復する。AIの逸脱を予防するとともに、中間成果ドキュメントを人間が確認し軌道修正。「振り返り」では、知見の識別や記憶の整理を行いドキュメントとして保存する。
4) 構造化メタデータ	プロジェクト指示ファイル(AGENT.md、PROJECT_PROFILE.yaml)や設計書により、AIに文脈を正確に伝える。

6つの発見価値

実践から発見した、CycleGen メソッド がもたらす6つの価値です。

1. **ドキュメントが「創造の源泉」になる** — AIが生成したドキュメントが、次の創造の起点になる
2. **「思い出せる」仕組みが手に入る** — ドキュメントがあれば、人間もAIも過去を復元できる
3. **過去の検索をAIに委ねられる** — 人間は検索から解放され、判断と創造に集中できる
4. **再現性の高いアウトプットが生まれる** — 設計書があれば、誰が実行しても同等の品質

5. AIが「賢くなっていく」 — 蓄積されたドキュメントによりAIがパーソナライズされる
注) AIのモデルが賢くなるのではなく、AIのコンテキスト領域に渡される情報が洗練されることで実現されます
6. 「何でも生成できる」可能性が開かれる — パソコンで作成できるすべてのデジタル作品が射程に入る

期待される効果

対象	効果
個人	単純作業ではなく判断の多いプロジェクト型の仕事で、再現性のある成果物を作成できる。
チーム	標準プロトコルにより、メンバー全員のAI利用品質が底上げされる。
組織	CYCLEごとに成果が可視化・蓄積され、知識資産として成長する。AIが再活用できる構造化データが自然と蓄積される。

3. CycleGen ソフトウェア 概要

CycleGen メソッドが実行される仕事環境を実現するソフトウェアです。

1,000時間超のCYCLEの実践で培った人間-AI協働の経験・知見を、ソフトウェアとして実装しています。AIエディタにアドオンする形式で利用できます。現在、Claude Code/Cowork、Google Antigravity で機能します。

CYCLE管理

CycleGen メソッドの中核である「計画→実行→振り返り」のCYCLEを、システムとして管理します。

3段階のCYCLE実行プロトコル

AIが設計・作成した成果物を、人間が承認するゲートを自動的に管理します。Stage1（計画・作成完了）→ Stage2（人間の承認）→ Stage3（確定・記録）の流れを制御します。

CYCLE完了報告書の自動生成

各CYCLEの成果物・判断事項・次アクションを、AIが自動的に報告書として記録。過去のCYCLEをいつでも振り返れます。そして、意図せずAIのセッションが途切れた際も、ドキュメント（記憶）をもとに再開できます。

プロジェクト状態管理

プロジェクトの現在フェーズ、最新活動履歴、次のアクションを構造化データとして常時更新。AIはこの情報を読み取り、文脈を正確に把握します。

記憶整理検索機構

- 協働で蓄積される大量の知識・ドキュメントを、複数の次元で整理・検索する独自システムです。
- 文脈に応じた最適な情報を提供: 「戦略を考えている」ときと「資料を作成している」ときでは、AIが必要とする記憶・利用するツールが異なります。AIが文脈を理解し、適切な知識を自動的に生成します。

- 認知負荷の制御: 心理学のミラーの法則に準拠し、一度にAIに渡す情報量と種類を最適範囲に制御。情報過多による品質低下を防ぎます。
- 高速検索: 4種類のインデックスによる検索。増えていくドキュメントの中から、文脈や仕事のタイプに合った記憶を高速で検索できます。
- CYCLE完了時の自動整理: CYCLEが完了するたびに、新たに得られた知見が自動的に分類・格納されます。使えば使うほどAIが賢くなる仕組みです。

ファイルバージョン管理自動化

プロジェクトのファイル構造・命名規則・バージョン管理を標準化し、人間とAIの双方が迷わずファイルにアクセスできる環境を維持します。

- 標準ディレクトリ構造: 設計書・完了報告書・プロトコル・テンプレート等を、決められた場所に配置。AIがファイルを探す時間を最小化します。
- 命名規則の統一: ファイル名・CYCLE番号・バージョン番号のルールを標準化。過去の成果物を確実に特定できます。
- ドキュメントバージョン管理: 作成する文書のすべての変更をバージョン管理。いつでも過去の状態に戻れる安全性を確保します。

Google ドキュメントやスプレッドシートに自動変換

パソコン上で作成されたMarkdownファイルを、Google ドキュメント、スプレッドシートやスライドに自動変換してGoogle ドライブに格納します。

- スタイル設定対応: フォント・行間・見出しスタイルを設定ファイルで管理。企業のドキュメント標準に合わせた出力が可能です。
- 自然言語で指示: 技術的な知識は不要。文書をGoogleドキュメントやスプレッドシートに変換します。
- チーム共有の自動化: 変換されたドキュメントはGoogle ドライブ上で即座にチームメンバーと共有可能。パソコン上の作業がそのまま組織の資産になります。

(オプション) 知的財産のデータベース管理とブロックチェーン登録

AIとの協働で生まれた知的財産を、自動的に認識・評価・保護します。

- 知的財産の自動認識: CYCLEの成果物から、知的財産の価値がある概念をAIが自動的に検出・提案します。
- 複数次元ハイブリッド評価: 技術的独自性・市場価値・開発段階など6つの軸で知的財産を定量評価。保護の優先順位を判断できます。
- ブロックチェーン登録 (OpenTimestamps) : 知的財産の存在証明をブロックチェーンに記録。低コストで確実なタイムスタンプを取得できます。

(オプション) デジタル作品制作フレームワーク

さまざまな種類のデジタル作品を制作するための、ガイド付きフレームワークを搭載しています。基本的には、「ビジネス職の方が実行できるように」というコンセプトで整備しています。

- **動画制作フレームワーク**: 企画→構成→制作→レビューの4フェーズで、動画コンテンツの制作をAIがガイドします。
- **AIエージェント・業務システム開発フレームワーク**: 要件定義→設計→実装→反映・テストの流れを、CycleGen メソッド に沿って管理します。
- **書籍・出版物フレームワーク**: 構想→アウトライン→執筆→校正の各フェーズを、テンプレートとプロトコルで支援します。
- **組織フィロソフィー構造化フレームワーク**: ヒアリング→言語化→構造化→AI実装の4フェーズで、創業者や組織の哲学・判断基準をAIが理解できるドキュメントに変換します。これにより、AIやAIエージェントが組織の価値観に基づいた提案・判断を行えるようになります。
- **フレームワーク自動生成**: 新しい種類のデジタル作品向けフレームワークを自動生成する機能。

4. もっと CycleGen を理解する

ここまでの章で、CycleGen の思想・メソッド・ソフトウェアの全体像をお伝えしました。この章では、皆さんがすでにお使いのツールや、関心をお持ちの領域と対比しながら、CycleGen の位置づけを掘り下げます。

多くの方が ChatGPT や Gemini などの生成 AI サービスを日常的に利用され、Notion や Asana でプロジェクトを管理し、場合によっては RPA や AI エージェントによる業務自動化にも取り組まれていることと思います。これらはいずれも優れたツールであり、CycleGen はそれらと競合するものではありません。

しかし、これらのツール群を見渡したとき、ひとつの空白に気づきます。AI との協働プロセスそのものを設計・管理し、その過程で生まれる知見を組織の資産として蓄積する——いわば「**AI との働き方の OS**」がまだ存在していないのです。

CycleGen が埋めようとしているのは、まさにこの空白です。以下のセクションでは、それぞれの視点から具体的にご説明します。

4-1. なぜ CycleGen ソフトウェアが必要か

「Claude Cowork や Google Antigravity などの AI エディタを使うだけではダメなのか？」——この疑問は自然です。

しかし、強力な AI エディタも、**使いこなす「作法」と、それを守らせる「ガードレール」**がなければ、能力の半分も発揮できません。目的を忘れて問題解決に夢中になったり、長時間の作業で文脈がぶれたりする——これは AI の特性です。

CycleGen は、CYCLE の時間制限やプロトコル（協働ルール）への準拠といった「制約」でこの特性に対処します。そして興味深いことに、この制約は AI の能力を制限するどころか、むしろ創造性を高めます。枠があるからこそ、AI はその中で最善を尽くし、人間の意図に沿った質の高い成果を生み出す。1,000 時間を超える実践の中で、この逆説的な効果——「制約パラドックス」を繰り返し体験してきました。

AIエディタ単体	CycleGen ソフトウェア
強力だが、使い方次第	最適な使い方を仕組み化
記憶は自己管理	記憶整理検索機構が自動管理
品質は人間の注意力依存	3段階プロトコルで品質保証
ノウハウは個人に蓄積	ドキュメント駆動で組織資産化

CycleGen ソフトウェア は、AIのポテンシャルを100%引き出し、安全に組織資産にするためのOSです。

具体例：目的逸脱の防止

AIエディタは強力ですが、問題解決に夢中になり本来の目的を忘れることがあります。

AIエディタ単体: 人間が常に監視し、逸脱を発見したら手動で軌道修正

CycleGen ソフトウェア: 30～40分のCYCLE単位で自動的に中間チェック。逸脱を早期発見・修正

具体例：知識の散逸防止

AIエディタ単体: 生成されたファイルは増える一方。どこに何があるか分からなくなる

CycleGen ソフトウェア: CYCLE完了時に自動整理。記憶整理検索機構が最適な情報を提示

4-2. CycleGenと汎用AIサービスの違い — 「AIにお任せ」と「意図を実現」の違い

生成AIサービスは急速に進化し、ChatGPT、Gemini、Claude のメジャーなAIサービス以外にも、GenSpark や Perplexity Pages など、プロンプトを入力するだけでレポートや記事を自動生成してくれるサービスが登場しています。

これらのサービスは非常に便利です。では、CycleGen は何が違うのでしょうか？

「抽象」から「具体」への軸

画像生成AIを例に考えてみましょう。

どちらも素晴らしい画像だが…

シンプルな指示で生成



Prompt: 「侍が刀を持って立っている」
Outcome: AIの解釈に依存。毎回異なる結果。

具体的な指示で生成

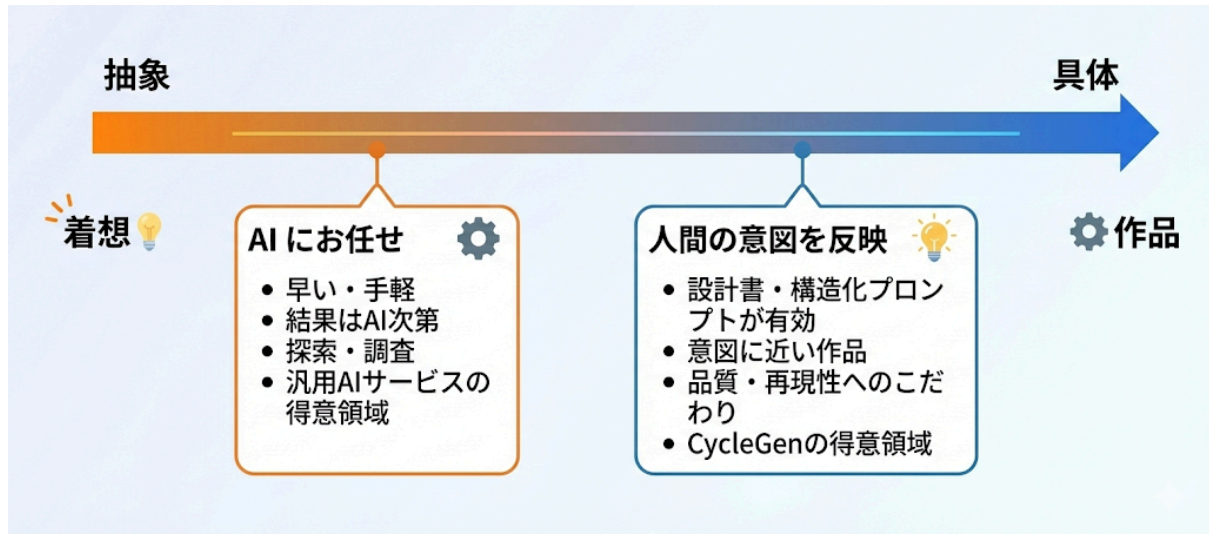


Prompt: 「夜明けの霧がかかった山道に立つ一人の侍、濃紺の袴と使い込まれた黒い羽織…」
Outcome: ユーザーの意図に近い結果。再現性が高い。

具体的なプロンプト（設計書）があれば、AIは道具として適切に機能

シンプルなプロンプトでは「AIにお任せの範囲」が大きくなります。具体的なプロンプト（設計書）があれば、意図した作品に近づきます。

2つのアプローチ、どちらも価値がある



CycleGenの役割: 設計書（構造化プロンプト）をAIと一緒に作る

CycleGenは、汎用AIサービスの競合ではありません。**補完関係**にあります。

汎用AIサービスで探索・調査を行い、「これだ」と決まったら、CycleGenで設計書を作り、意図通りの作品に仕上げる。この組み合わせが、最も効果的なAI活用です。

CycleGenの核心は、「**設計書（構造化プロンプト）をAIと一緒に作り、人間が判断する**」というプロセスです。

- AIが設計書のドラフトを生成
- 人間が意図を確認・修正
- 設計書に基づいてAIが作品を制作
- 人間が最終判断

このCYCLEを回すことで、「AIにお任せ」では得られない、**意図通りの作品**が生まれます。

私がよくやる実践的な使い分けは以下です。

「CycleGenでCYCLEを回していくと創造の源泉（中間成果物）から、意図したデジタル作品を作成するための**設計書や構造化プロンプト**を生成できる状態になる（抽象→具体）。

CycleGenで生成した設計書や構造化プロンプトのドキュメントを、ClaudeやNotebookLMに共有してプレゼン資料の作成やポッドキャスト音声の作成を行う。」

「完成品が大切」という感覚から、「完成品を再現するための『**創造の源泉**』や**設計書が大切**」という感覚に変わっています。

4-3. 単発タスク vs プロジェクト型

「時間軸・複雑さ」という視点

「抽象-具体」に加えて、もう一つ重要な軸があります。それは「単発タスク」か「プロジェクト型」かという時間軸です。

種類	時間	例	特徴
単発タスク	～1時間	メール文案、簡単な調査、アイデア出し	1回の対話で完結
プロジェクト型	数日～数ヶ月	事業開発、新サービス企画、システム設計	複数フェーズ、多数の成果物

プロジェクト型の仕事の特徴

プロジェクト型の仕事には、単発タスクにはない複雑さがあります。

特徴	単発タスク	プロジェクト型
文脈の複雑さ	単純（1回で説明可能）	複雑（過去の判断・成果物が前提）
セッション	1回で完結	複数回にまたがる
成果物の数	1つ	多数（相互に依存）
判断ポイント	少ない	多い（各フェーズで人間が判断）
引き継ぎ	不要	必要（担当者変更、長期中断）
資産化	不要	必要（組織の知識として蓄積）

CycleGenが真価を発揮する領域

プロジェクト型の仕事の例:

領域	具体例
----	-----

事業開発	新規事業企画、ビジネスモデル設計、市場調査・分析
新製品・サービス開発	サービスコンセプト設計、顧客価値定義、収益モデル
プロジェクト計画	中長期計画、ロードマップ、マイルストーン設計
コミュニケーション	PR計画、ブランド戦略、コンテンツ戦略
AIエージェント/システム開発	要件定義、基本設計、詳細設計、テスト計画
書籍・出版	構想、アウトライン、執筆、編集

これらの仕事に共通するのは、「数日～数ヶ月にわたり、複数の成果物を積み上げ、人間が各所で判断を下す」という構造です。

なぜプロジェクト型で汎用AIサービスだけでは限界があるのか

汎用AIサービスだけでプロジェクト型の仕事を進めると、以下のような問題が発生する可能性があります。

1. **文脈喪失:** セッションが切れると、過去の議論・判断が失われる
2. **属人化:** 特定の人々のチャット履歴にしか情報がない
3. **再現不可能:** 同じ品質の成果物を再び作れない
4. **引き継ぎ困難:** 担当者が変わると、ゼロからやり直し
5. **資産化できない:** 組織の知識として蓄積されない

4-4. CycleGen と AIエージェントとの関係

CycleGenと業務自動化AIエージェントの決定的な違いは、「AIに仕事を任せきりにする（自動化）」のか、それとも「AIと一緒に仕事を創る（協働）」のかという点にあります。

1. 解いている「問題」の違い

両者は似ているようで、解決しようとしている課題が根本的に異なります。

業務自動化AIエージェント

- 目的：人間を介在させないこと（省人化・自動化）
- 価値：処理の効率化と、失敗（エラー）の排除
- 判定基準：事前に定義されたルールで固定される

CycleGen

- 目的：人間の判断力を最大化すること
- 価値：意図ある成果物の創出と、試行錯誤のプロセスそのもの
- 判定基準：各工程（CYCLE）ごとに人間が判断を下す

2. 適用される「業務領域」の違い

それぞれに適した業務は明確に棲み分けられています。

特徴	業務自動化AIエージェント	CycleGen
得意な業務	コールセンター一次対応、データ入力、定型事務	調査研究、企画立案、新規事業開発、要件定義
業務の性質	入力と出力が明確、ルール化が可能、例外が少ない	正解が事前に定義できない、前提が変化する
主役	AI	人間 + AI

3. なぜ使い分ける必要があるのか

この違いを混同すると、「プロジェクト型の業務をAIに丸投げして破綻する」か、「自動化すべき単純作業に人間が縛られ続ける」という失敗を招きます。

CycleGenは、RPAのように人を減らすためのツールではなく、「**正解のないプロジェクト型の仕事**」において、**人間が主役であり続けるための基盤**として設計されています。

4. CycleGenとAIエージェントの要件定義・設計・デプロイを行う

ここまでCycleGenとAIエージェントを対比してきましたが、**両者是对立する存在ではありません**。むしろ、AIエージェントの活用が本格化するほど、CycleGenの役割は大きくなると考えています。

その理由は明確です。**AIエージェントの導入には、「どの業務に適用するか」「どのようなルールで動かすか」「どのデータにアクセスさせるか」といった判断が不可欠**です。

CycleGenは、こうした要件定義と設計をAIとの協働で行い、その判断プロセスをドキュメントとして残します。多くのAIエージェント製品はAPIを備えていますので、CycleGenで作成した設計書をもとに、**エージェントへの設定反映まで一貫して行う**ことも可能です。

このアプローチは、特にビジネス部門において重要な意味を持ちます。現場の業務担当者がAIエージェントを手軽に作成できる環境が整いつつある一方で、組織としてのガバナンスが追いつかず、管理されない**「野良AIエージェント」が増加するリスク**が指摘されています。

CycleGenを活用すれば、組織のIT部門/CoE部門が定める**統制ポリシーをAIが自動的に参照**したうえで要件定義書・設計書を作成するため、統制の取れたAIエージェントの構築と運用が仕組みとして実現します。

4-5. CycleGen と Notion/Asanaなどプロジェクト管理ツールとの関係性

「管理」と「創造」 — 役割の違いを理解する

Notion、Asana、Trello、Monday.comなど、優れたプロジェクト管理で利用されるツールが数多く存在します。これらのツールにもAI機能が搭載され始めており、「CycleGenとどう違うのか？」という疑問は自然です。

結論から言えば、**両者は競合ではなく、むしろ補完関係**にあります。

本質的な違い：何を「管理」するのか

	プロジェクト管理ツール	CycleGen
主な目的	タスクと進捗の管理	思考と判断のプロセス管理
管理対象	やるべきこと (To-Do)	なぜそう判断したか (Why)
蓄積されるもの	タスク、期限、担当者、ステータス	判断基準、設計書、中間成果物
AIの役割	タスク整理、要約、リマインド	設計書作成、記憶継承、創造支援
得意領域	チーム協働の可視化と効率化	個人/チームの知的生産と資産化

具体例で理解する

シナリオ：新規事業の企画開発

Notion/Asanaでの管理（プロジェクト管理）

プロジェクト：新規SaaS事業企画

└─ タスク1：市場調査 [完了] 担当：田中

└─ タスク2：競合分析 [進行中] 担当：佐藤

- └─ タスク3：ビジネスモデル設計 [未着手] 担当：鈴木
- └─ タスク4：収支計画作成 [未着手] 担当：田中

→ 「何をいつまでに誰がやるか」が管理される

CycleGenでの管理（思考プロセス管理）

CYCLE 15：市場調査の完了

- 調査結果：X市場は年率20%成長、Y顧客層が有望
- 判断：Y顧客層をターゲットとする理由：
 - 既存ソリューションの不満度が高い（NPS -20）
 - 予算決裁権を持つ層が多い（60%）
- 却下した選択肢：Z顧客層（理由：市場規模は大きいですが競合過多）
- 次のアクション：Y顧客層のペルソナ詳細化

CYCLE 16：ビジネスモデル設計

- 検討したモデル：①従量課金、②定額制、③フリーミアム
- 選択：定額制（理由：顧客インタビューで予算確保の確実性が重視された）
- 設計書：価格帯3段階、機能マトリクス、移行パス
- 懸念事項：初期導入ハードルの高さ → オンボーディング強化で対応

→ 「なぜその判断をしたか」が記録される

両者を組み合わせる実践例

最も効果的なのは、CycleGenで「判断」を生み出し、Notionで「実行」を管理する組み合わせです。

ワークフロー例

CycleGenで戦略を練る

CYCLE 1-5：市場分析、ビジネスモデル検討、設計書作成
成果物：事業計画書、判断基準ドキュメント、設計書

Notionに実行タスクを展開

CycleGenで作成した設計書をもとに、Notionでタスク分解
担当者アサイン、期限設定、進捗管理

実行中の学びをCycleGenにフィードバック

CYCLE 6-10：実行フェーズで得た気づきを記録

「当初の想定と違った点」「うまくいった施策」を構造化
次のプロジェクトの設計書に反映

なぜ CycleGen が必要なのか

Notionのようなツールは、すでに決まったことを整理・管理するのが得意です。

しかし、「まだ決まっていないこと」を決めるプロセス——市場をどう読むか、どの戦略を選ぶか、なぜその判断をしたのか——は、プロジェクト管理ツールでは記録しづらいためです。

Notionだけで起こりがちな問題

問題	なぜ起こるか
判断の経緯が消える	タスク管理中心なので、「なぜそう決めたか」を書く場所がない
AIとの対話が散逸	Notion AIとの対話は履歴に残らず、再現できない
設計書が作られない	タスクリストは作るが、「どう作るか」の設計書は作成されにくい
過去の判断が活かされない	プロジェクトごとに完結し、横断的な知見蓄積が弱い

CycleGen と Notion/Asana の理想的な関係

【戦略・企画フェーズ】

CycleGen → 判断・設計書作成

↓

【実行フェーズ】

Notion/Asana → タスク管理・進捗可視化

↓

【振り返りフェーズ】

CycleGen → 学びの構造化・次回設計書へ反映

まとめ：どちらか一方ではなく、両方を活かす

使い分けの指針	ツール
「何を作るか」を決める	CycleGen
「誰がいつまでにやるか」を決める	Notion/Asana
「なぜそう判断したか」を残す	CycleGen
「進捗状況」を可視化する	Notion/Asana
「次のプロジェクトで再利用」する	CycleGen（設計書・判断基準）

CycleGenは、NotionやAsanaの「前」と「後」で価値を発揮します。

前：実行に移す前に、AIと一緒に「何をどう作るか」を練り上げる

後：実行後の学びを構造化し、組織の知的資産として蓄積する

この組み合わせにより、**管理の効率**と**創造の質**の両方を手に入れることができます。

4-6. AIエージェント時代の隠れたボトルネック——構造化データの不足を、業務の中で解消する

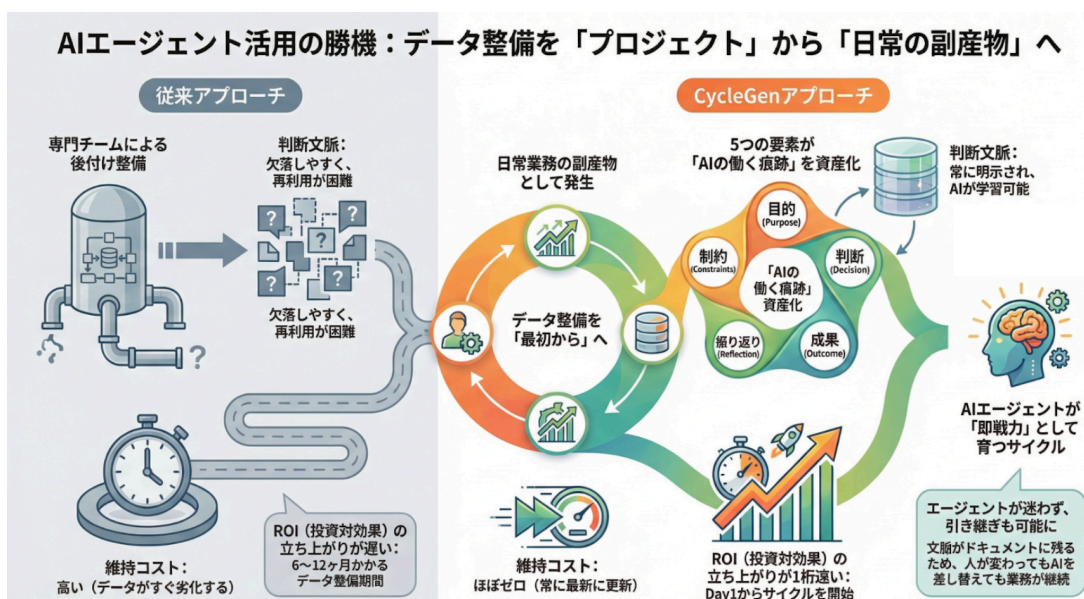
AIエージェントの導入を検討する企業が増えています。しかし、多くのプロジェクトが直面するのは、AIの性能不足ではなく、AIに渡すデータの質と構造の問題です。判断文脈が記録されていない。過去の意思決定の根拠にアクセスできない。ドキュメントはあるが、AIが解釈できる形式になっていない——こうした「データの空白」が、AIエージェントの活用を阻んでいます。

従来、この問題に対するアプローチは「データ整備プロジェクト」でした。専門チームを編成し、既存データを棚卸しし、構造化する。しかしこのアプローチには構造的な弱点があります。整備した瞬間からデータの陳腐化が始まり、維持コストが膨らみ、現場の業務と整備作業が乖離していくのです。

CycleGenは、この問題を根本から転換します。日常の業務——調査、企画、設計、意思決定——がCYCLEとして回るたびに、「何を目指し、何を判断し、なぜそう決めたか」が構造化ドキュメントとして自動的に蓄積されます。つまり、業務そのものがデータ整備になる。後付けではなく、業務プロセスに組み込まれた構造化です。

この蓄積は、AIエージェントにとって極めて価値の高い学習資源になります。判断文脈が明示されたデータは、単なるFAQや手順書とは異なり、AIが状況に応じた判断を行うための基盤となるからです。

「データ整備を"プロジェクト"から"日常の副産物"に変える」——この構造転換が、AI導入のROIを根本から変える可能性を持っています。



さいごに

「私だけではできなかった」 — 能力拡張の実感

人間の能力が拡張した感覚を何度も経験しましたが、特に印象的なエピソードを2つご紹介します。

エピソード1：遊び心が方法論に化けた日

CycleGen ソフトウェアの原型となるシステムを開発していた時のことです。

Claude Codeと実験を重ねながら開発を進めるなかで、ふと思いつきました。「システム開発のフェーズに、**創世記とかカンブリア紀みたいな名前をつけたら面白いんじゃないか**」——楽しく進めたい、ただそれだけの軽い提案でした。

ところが、Claude Codeは単にフェーズの名前をつけるだけにとどまりませんでした。この着想を拡大解釈し、**それぞれのフェーズに対応する開発方法論を自ら構築し、実際にそれに基づいて開発を進めた**のです。

「創世記」ではシステムの基盤を作る。「カンブリア紀」では実験的にさまざまな機能を開発し、成果の出たものだけを製品版として採用する。——**生物の進化になぞらえた、段階的な開発アプローチ**が自然と形になっていました（そして、「実験的にさまざまな機能を開発し、成果の出たものだけを製品版として採用する」は、人間であれば途方にくれるアプローチです）。

このことに気づいたとき、とても言葉では言い表せない感覚に包まれました。私の何気ないひと言が、AIとの協働を通じて、体系的な方法論へと結晶化した。**とてもじゃないけれど、私だけではできない。**

エピソード2：この冊子そのもの

もう一つの事例は、いま皆さんが読んでいるこの冊子です。

メソッドの体系化、構成の設計、文章の執筆、図表の作成——これらすべてを、私とAIの協働だけで作り上げました。自分でも信じがたいですが、これは紛れもない事実です。

まさに、CycleGen の核心メッセージを体現したプロセスでした。

ドキュメントはAIが書いて保存。人間は判断する。このアプローチを着実に繰り返すことで、人間はAIとの協働だからこそ到達できる領域へ。

AIとの協働の深さが生む、もうひとつの可能性

これらの体験を通じて、ひとつの着想が芽生えています。まだ確信というには早いのですが、共有させてください。

ビジネスの世界では、より多くの顧客に、より早く届ける「Scale Out」が正攻法とされてきました。効率的で合理的なアプローチです。しかし、誰もが同じ方法で広げられるようになったとき、「広さ」だけでは差がつきにくくなっているのも事実です。

CycleGen 創出の取り組みを通じて私が体感しているのは、それとは異なる方向性——ひとつのテーマ、ひとつの関係性に深く潜ることで、そこにしかない価値が生まれるということです。私はこれを「**Deep Out**」と呼んでいます。深く理解するほど、**生まれる価値は複利のように積み重なっていく**。そして興味深いことに、深く掘った先に見つかるものは、実はとても普遍的で、他の領域にも自然と広がっていく手応えがあります。

かつて、深さの追求には膨大な時間がかかりました。しかし今、**AIとの関係性を深めることで、深化のスピードそのものが変わり始めている**と感じています。人間が方向を示し、AIが深く掘り進める。その協働の深さが、Deep Outを現実の選択肢に変えつつあるのかもしれない。

これはまだ、1,000時間の協働から得た一個人の実感です。しかし、もしこの方向性に可能性があるとするれば、CycleGenはその実践の入り口になれるのではないかと考えています。

次は、あなたの番です

CycleGen に、特別な技術力は必要ありません。必要なのは、「この事業をもっと良くしたい」「この課題を解決したい」という意志と、**AIとの協働に踏み出す一歩**です。

ビジョンを言葉にすれば、AIがドキュメントとして形にする。人間がそれを判断し、CYCLEを重ねるたびに、成果物が積み上がり、組織の知的資産が厚みを増していく。その過程で、**「自分だけでは到達できなかった領域」に手が届く瞬間**が訪れます。

次にその体験をするのは、あなたと、あなたの組織です。

次のステップ – CycleGen との接点

CycleGen は、**1,000時間超**の実践から生まれた「人間-AI協働の仕組み」です。メソッドの導入、共同研究、協働実証実験、協業についてのご相談を承っています。

まずは**30分のオンラインデモと私との対話**で、CycleGen の実際の動作や生成されるドキュメントの様子をご覧ください。そして、この冊子では伝えきれない裏話や失敗談などもお話できるかもしれません。

お問い合わせ：info@rashikucorp.com

著者について

佐藤 純也（さとう じゅんや）

株式会社らしく 代表



岩手県奥州市出身、東京在住

1989年、埼玉大学大学院電気工学専攻を卒業後、株式会社リクルートに入社し、情報システムの設計・開発およびグループ企業の業務改革・システム化計画を担当。その後、日本ジェイディエドワーズ（現日本オラクル）でのERPソリューション営業、ダブルクリック（現Google広告事業）でのネット広告配信ASP営業責任者を経て、2006年より株式会社セールスフォース・ドットコムにて中堅・中小企業向けの導入支援サービスの責任者を歴任。

2011年、株式会社らしくを設立。Google WorkspaceをはじめとするGoogle Cloudを組織で効果的に活用するためのサービス・ツールの企画・開発に取り組む。日本を代表する企業での「DX新しい働き方の実現プロジェクト」にも参画し、協働的で生産性の高い働き方の実現を支援してきた。

2025年7月にAIとの145時間にわたる集中的な協働を実践。人間-AI協働における記憶継承手法や協働ワークフローなど、多くの新しい概念と仕組みを創出。本書はその成果の一部をまとめたものである。

知的財産権および著作権に関する表示

著作権表示

© 2026 株式会社らしく (RASHIKU Corporation) . All rights reserved.

本文書に記載されたすべてのコンテンツ（テキスト、図表、概念図、方法論、フレームワーク、システム設計を含むがこれに限らない）は、株式会社らしくおよび著者 佐藤純也の著作物であり、日本国著作権法およびベルヌ条約（文学的及び美術的著作物の保護に関するベルヌ条約）をはじめとする国際条約に基づき保護されています。

知的財産の存在証明

本文書に記載されたメソッド、ソフトウェア設計、および関連する知的成果物（300件超）は、OpenTimestampsプロトコルを用いたブロックチェーンタイムスタンプにより、その存在時点と非改ざん性が記録されています。これらの記録は、知的財産の創出時期と内容の同一性に関する客観的な証拠として保全されています。

特許出願に関する留意事項

本文書に記載された技術の一部について、特許出願の準備が進行中です。本文書の開示は、いかなる特許権の放棄も意味しません。

利用条件

本文書は、以下の目的に限り閲覧・参照いただけます：

- CycleGenの評価および導入検討
- 投資判断のための情報収集
- パートナーシップ検討のための情報共有

本文書の全部または一部を、株式会社らしくの書面による事前の許諾なく、複製、配布、公開、または二次的著作物の作成に利用することを禁じます。

準拠法および管轄

本文書に関する知的財産権の解釈および紛争の解決には、日本国法を準拠法とし、東京地方裁判所を第一審の専属的合意管轄裁判所とします。

国際的な権利保護

本著作物は、ベルヌ条約（181ヶ国加盟）に基づき、日本国外においても自動的に著作権の保護を受けます。ベルヌ条約加盟国においては、登録手続きなしに著作権が認められます。

ドキュメントは AI が書いて保存。

人間は判断する。

このアプローチを着実に繰り返すことで、
人間は AI との協働だからこそ到達できる領域へ。

次のステップ

メソッドの導入、共同研究、共同実証実験、
協業についてのご相談を承っています。

30分のオンラインデモ

CycleGenの実際の動作や
生成されるドキュメントの様子をご覧ください。

お問い合わせ

info@rashikucorp.com

株式会社らしく
RASHIKU Corporation

佐藤 純也
Jay (Junya) Sato

1,000h+

実証済み協働時間

300+

創出された知的財産

10X

生産性向上